

未曾有なまでに深刻化した環境危機に対し、高いコンセンサスが求められている。人間とノンヒューマンとの関係は、産業化の進む中、私的所有の概念に基づく富、資産、資源といった用語で記述されてきた。アルネ・ネスは、産業社会の一貫性がなく、矛盾さえしている環境主義の論理をあげき出す。私たちは地球という惑星を保護すべく、神学的とまではいかないまでも倫理的といえる義務を負っている。しかしながら、生物圏がその生き残りを人間社会に依っていないときは特に、私たち人間には、ノンヒューマンを適切に表象する能力がないと思っている。以下に掲げる DEM(ディーブ・エコロジー運動)の規範原理 No.1 および No.2 は、エコロジー革命に向けた「倫理の非倫理的な幕開け」であり、「暴力的な幕開け」である。なぜなら「他者の存在無くしてどんな倫理も存在しない」からである。(デリダ:1976, 139-40)

- 1.人間およびノンヒューマン生物の福利と繁栄は、それ自体に価値がある。ノンヒューマンの価値は、人間にとってのその実用性から切り離されてある。
- 2.生物の豊かさと多様性は、それ自体に価値がある。

人間対ノンヒューマンを含む全ての対立は、西洋自民族中心主義の形而上学に根ざしている。このようにあらゆる生物にある本質的な価値を宣言することは、形而上学の点では非倫理的であるが、エコロジー革命に向けた新しい倫理の暴力的な幕開けである。もし倫理が言及されるのであれば、他者の存在が真剣に考慮されるべきである。マハーヤーナ仏教も、自我の消滅ではなく、利己主義から共感へといたる自己実現という点において注目されるのである。その精神は禅師西翁の法話「隨處作主(どこにしようとする導師であれ)」によく表れている。生態系の危機は深刻な環境問題だけではなく、家族、階級、国家といった近代社会の基本システム全てが依拠している産業社会それ自体の終焉にまつわるものでもある。それゆえ生態系の危機は、産業革命に由来する近代社会の既存システム内では解決されないだろう。私は DEM の究極的な目標に同意していることをはっきりと表明したい。しかしその手段に関して、私は DEM の支援者が全く知らないような具体的なアイデアに対して多くの提案ができることを見出した。たとえ私たち全てが心から DEM の原理に同意するとしても、DEM のメッセージがあまりにナイーブであるだけに、実現可能性がその主要な問題の1つであることは明らかである。

生態系の持続可能性に向けた計画は先進国地域を想定しているはずだが、工業化による人口増加と資源消費で生活水準を高めようとするライフスタイルへ変容する発展途上国や後発発展途上国も含みつつ、世界規模で解釈され、実行されなければならない。台風や洪水、干魃といった激しい気候変動によってもたらされる局所的な問題の主な解決法の1つは、例えば、南半球の極めて低い生活水準に起因する熱帯雨林の伐採で生じた温室効果ガスについて論じた映画『不都合な真実』におけるアル・ゴアの努力など、地球的な協力によってのみ示される。発展途上国もしくは後発発展途上国における知識人の見解は、知識人全てが生態系の危機という地球的な問題を解決する緊急性を深刻に感じているとはいえ、先進国におけるそれとは随分異なるであろう。

ネスは「地球惑星は三種類の地域に分かれるだろう。荒野、点在するフリーネイチャー、人間に支配された地域である」と言う(ネス:2005b, 30)。彼は公園に限らず都市の「フリーネイチャー」を、「どんな子供もフリーネイチャーにふれあえるべきである」という目標でもって定義する。「なぜなら、子供たちは、自然とのふれあうことによって、他の生き物も自分たちのように生きたいと欲していることや、自然がすばらしく美しいこと、そしていっしょにいるのもすばらしい存在であることを、いとも簡単に学び取るからだ」(ネス:2005c, 50)。子供が安全に遊べる都市のフリーネイチャーという概念は、多目に見ても世界の先進国トップ 20 を除き、ほとんど全ての国々の市民にとってはあまりに現実離れしており、理解することもままならない。それは手つかずの自然にふれるため、私たちが遠く離れた手垢のついていない場所に行くことができるという元来の考えに基づいている。しかし実質的にほとんど全ての環境は、人間による介入の明らかな痕跡を有している。火、動物の狩猟、植物や果実の収穫の痕跡である。世界には深刻な人間の衝撃を受けたことのない地域は大して残っていない。ネスの都市におけるフリーネイチャーは、手つかずの自然ではなく人間の手が入った自然である。

都市のフリーネイチャーは、物質主義的精神に基づく産業革命の牧歌的視座の点から、原初の様式の装い、偽装としてあげき出される西洋的なエコロジー概念の1つである。おそらくこの人間の野心は、それが本質的に神学的であるため決して尽きることはないだろう。「しかしながら、その閉域はすでに素描されているのだ」。「慎重で綿密な一つの言説」が産業革命という形而上学の歴史的な閉域を素描するために必要とされている批評概念は(デリダ:1976, 14)、(a)「それらが所属している機構はそれら自身によって解体し得るのだ」ということを厳密に指摘する批評概念と、(b) 同じ過程で「閉域外のほのかな光を未だ名付け得ぬままに垣間見せている断層についても、指摘」する批評概念の双方である。(デリダ:1976, 14)。これが、DEM の原理がとてつもないナイーブで十分な実現可能性に欠け、ネスが恥ずかしげもなく「環境哲学にはどんな専門家もい

ない」、「それゆえさやかなもののだとしても、チームワークがどのエコソフィー研究においても重要である」と言う理由の1つである(ネス:2006, 26-7)。

産業革命の点から環境問題を解決するあらゆる可能性こそが、まず「袋小路」の瞬間まで、エコロジカルな代替計画のあらゆる可能性を理解しようとする前に考えられなければならない。なぜならエコロジー革命は、エコロジーが決して産業の発展というカテゴリーにおいて考えられないとしても、エコロジストが闘おうと主張する産業革命に属しているからである。エコロジー革命は産業革命の最中だけでなくそれ以前にも既に言説化されている。誰もエコロジー革命の始まりを宣言しなかったが、エコロジー革命は既に至るところで記述されていることが知られている。エコロジー革命は、公的に宣言されることなく記述されてきたのである。

私は近代の発展が評価されてきたレベルにおいて、産業革命の真の目的を敢えて問うことはしない。産業の発展と環境保護の両方を、後発発展途上国にもたらすことは無謀な作業であり、それはいつも自然環境の保護ではなく、多くの政治的口実を伴う過剰な自然破壊につながっている。環境主義者の政治手法は、環境保護を持続させるために必要な社会的、経済的な条件を持たないような国で環境保護を推奨するといった、性急でかつ短絡的なものである。環境学者は他国だけでなく自国に内在する社会の複雑さを理解し、見定め、それに応答する準備ができていない。

私は DEM の規範原理それ自体には反対していないことを強調したい。ただ私はこうした原理が、凡例的に追い求めているその方法に異議を唱えている。私たちの多くは、市場で力をもつ少数派の人々に、見える形で地元社会に重要な貢献をすることによって富を分配するよう頼むことで社会的緊張を緩和しようとする一時的でしかない解決法に満足しきっているわけではない。貧困と病に苦しむ者への慈善活動によりノーベル平和賞を授与されたマザー・テレサは、社会問題に取り組むうえで、昔ながらの共感に満ちた方法を具象化している。政府は時折、民間セクター程度にしか有効ではなく、今や学校、病院、公共交通機関、ゴミ清掃のような社会サービスの全てに目配りする能力の限界を示している。

ジャン=フランソワ・リオタールは、モダニズムからポストモダニズムへと進行する世界観の完全な変化に向けたある種のマニフェストとして、『ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム』を出版した。しかしモダニティが奥ゆかしくお辞儀をし、ポストモダニティへ道を譲るわけではない。モダンの条件は極めて長い期間にわたり、ポスト・モダンの条件と同じく重要であるだろう。デリダが「歴史は決定可能な対象にも、支配可能な全体性にもなりえない」なぜなら、「歴史は責任と信[仰]と贈与に結びついているからだ」と書くとき(デリダ:1995, 5-6)、彼は私たち人間がコンセンサスの外側で、知識と確実性の公認の限界を越えて、絶対的な決定を行うことはできず、私たちがまさに決定不能の条件という試練に耐えなければならないと指摘する。

『死を与える』でデリダは宗教の歴史を、狂躁的神話学からプラトニズム、その対極にある責任、そしてキリスト教への変遷過程として説明しようとする。

狂躁的なものは、ひとたび体内化され、規律化され、従属させられ、支配されても、廃棄されはしない。それは責任ある自由の神話学をひそかに活気づけ続けている。こうしてこの神話学は、第二の転換ないしは転回すなわちキリスト教の後で、一つの政治学、西欧の政治的なものの、今日でも部分的に無傷な土台となるだろう。(デリダ:1995, 19)

私はこれが人類史の最も精緻な記述の1つであると思う。その主な理由は、デリダがある世界観から別の世界観へ歴史的に変遷する過程を記述するとき、それを二元論的メカニズムによって行わないからである。私は歴史的変遷に関するデリダの記述にあわせ、超越と包含という二つの概念を組み合わせた「包越(transclusion)」という言葉を作った。

ジョナサン・カラーは彼の本『ディコンストラクション』で、デリダの脱構築の観点からフェミニズム運動を記述する(43-64)。そのなかで「包越」の3つのレベルの過程が、次のように適用されている。(1)差異の哲学。女の生物学的条件が、通常、セックスという用語で説明される男女の差異に基づき強調される。(2) 差異化の哲学。女の政治的条件が、通常、ジェンダーという用語によって説明される、男らしさと女らしさの差異化行為に基づき強調される。フェミニズム批評は、読者の意識を変えることで世界を変える政治的行為である。(3) 差延の哲学。女の文化的条件が、通常、セクシュアリティという用語で説明される男性性と女性性の差異に基づき強調される。フェミニズム批評の3つめのレベルの仕事は、「今日の批評の手続き、前提、そして目標が、男の権力保持と共犯関係にあるかどうかを精査し、新たな批評を模索する」ことである(カラー, 61)。

3つのレベルの包越システムを用いることで、近代産業社会から今日に至る歴史的変遷の過程を以下のように記述することができるだろう。

「差異」「差異化」「差延」

主体 主体性 主体化

政策 政治 政治的なもの

リアリズム シンボリズム 脱構築

本 テキスト テキスト性
解放 傲慢 謙虚

下記の No. 5 および No. 7 の規範原理は、ネスによって示唆される幾つかの実践的解決法として理解されるだろう。

5.現在の人間とノンヒューマン世界との相互干渉は過剰であり、その状況は急速に悪化している。

7.高い生活の質への賞賛が、高い生活水準への賞賛に取って代わるであろう。

公的かつ私的消費(No. 7)の漸減と同様に人口(No. 5)の漸減はあまりに理想主義的であり、ここでは達成され得ない。謙虚と節制の原理それ自体は、誰も行為へと導かない。経済的利益と健康との間に摩擦があるとき、人は一般的に雇用や収入を与えるものを支持するであろう。私たち人間は今、私たちの福利に対する脅威が至るところにある世界に生きている。雇用保障の喪失と失業、家族の崩壊、罪と罰。生態系崩壊の可能性は言うまでもない。

デイビッド・W・ロウは、「関連 3 システムとしての環境への関心」という彼の論文で、私の 3 つのレベルの包越システムと極めて似ているフランク・フィッシャーの「環境への関心 3 段階」を紹介する。3 つの発展深化型レベルは、(1)環境崩壊の認知を確立する警告レベル、(2)環境問題における社会的洞察と政治行動の形成、(3)エコロジカルな思考法そのものが将来にもたらすであろう成果の精査である。DEM の原理は第 3 レベルを目指しているように見える一方、新たな行動計画を示そうとするときは特にそうであるが、ネスは警告レベルにいる。ネスが自分の行動計画は「発展の可能性が極めて低い、指標としては重要である」と認めるとき、自らの環境への関心レベルを十分に認知している(ネス:2005a, 88)。

人間同士だけでなく、自然と人間との交渉プロセスは、氷河期最期の狩猟採集民の時代よりすでに行われてきた。交渉はいくらかの成功を保証するための合意を生み出すシステムではなく、産業社会に潜む、起こりうる、避けがたい危険を防ぐ手続きを強固にする活動域である。エコロジー研究の主な仕事は「狭間」ですでに起こっていることを読み、書くことであるはずだ。私たちが個々の生活空間の境界線において交渉する方法を知っているならば、隣接する人間やノンヒューマンの社会と、境界その他の慣習において交渉を組織的に行うことができるし、現に行っている。その交渉は、生態系の持続可能性に向けた新たな行動計画を生み出すであろうが、その持続可能性は、特殊な規則に従って作り出されるものではなく、適切な計画の選択を可能にすべく信じがたいほど多様な素材を用意することによって実現するのである。驚くべき回復力と進化の可能性が、新たな計画作りにおける途方もない代替能力によって供与されるであろう。

DEM という深く究明していく研究方法は、きわめて称賛に値する。不幸にも、それは現在の危機に対応し切れてはいない。究明プロセスをさらに深化させることが、永遠に変化しつづける世界に対処するため真摯に必要とされている。こうした理由で私はディープ・エコロジー運動の代わりに、DEM をディーパー・エコロジー運動と呼びたいのである。私が望む緑の社会は、単に生態学的に成功しているだけではなく、十分に産業化されてもいるであろう。DEM の規範原理に向けたホイッスルは、地上の全ての人に届くほど高らかに、そして長く吹かれるであろう。なぜなら多くの環境摩擦に向き合う必要がなくなるまでには、時間がかかると思われるからだ。

引用文献

- カラー、ジョナサン。 1982. 『ディコンストラクション I, II』富山太佳夫、折島正司訳、岩波書店、(1985/ 1989)。
デリダ、ジャック。 1976. 『根源の彼方に—グラマトロジーについて上下』足立和浩訳、現代思想社、(1972)。
---。 1995. 『死を与える』廣瀬浩治・林好雄訳、ちくま学芸文庫、(2004)。
ロウ、デイビッド・W。 2003. 「関連 3 システムとしての環境への関心」『トランペッター19-1』57-68。
リオータル、ジャン=フランソワ。 1984. 『ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社、(1989)。
ネス、アルネ。 2005a. 「エコソフィー、人口、持続可能な開発」『トランペッター21-1』72-89。
---。 2005b. 「建築とディープ・エコロジー」『トランペッター21-2』29-34。
---。 2005c. 「人類は宇宙的な役割を受け持つのか。地球惑星を保護し回復させること」『トランペッター21-1』49-52。
---。 2006. 「規範システムの方法論についてのノート」『トランペッター22-1』14-28。